三宅町

聖徳太子と太子道

太子道

奈良盆地のほぼ中央に位置する、奈良県で最も小さいまち三宅町には、飛鳥時代に聖徳太子が斑鳩宮から三宅の原を経て飛鳥の小墾田宮へ、お供の調子麿を従え、愛馬黒駒に乗って通われたという伝承があり、その道を「太子道」と呼んでいます。

奈良盆地中央部の三宅町屏風から田原本町保津方面へと続く一本の道（南南東方向へ斜行している部分）が今日に至るまで残っています。この道路が、壁の補強材の筋違に似ているところから「筋違道」とも呼ばれました。

『万葉集』に詠まれている「三宅道」がこの太子道のこととみることもできます。中世以降は「法隆寺街道」とも呼ばれ、生活道路として盛んに利用されるようになりました。現在では町道70号線として活用されています。

また、沿道にある屏風杵築神社には「屏風の清水」と呼ばれる太子ゆかりの文化資源があります。太子が屏風村をお通りの際、お供の調子麿が飲み水を探しましたが、見つかりませんでした。そこで太子が従者の持つ矢でこの地をひと突きすると、なんとそこからきれいな水がこんこんと湧き出てきました。村人はこの清水を「矢尻ノ井戸」と名付け、皆で大切に使いました。

矢尻ノ井戸

白山神社（三宅町屏風）

白山神社は、太子道の沿道にあり屏風杵築神社と相対する位置にあります。境内の奥には聖徳太子が斑鳩から飛鳥への往来の際、この地で休憩された時に腰をかけられたと伝わる「腰掛石」や、太子の愛馬「黒駒」の手綱を結わえたといわれる「駒つなぎの柳」があります。また、太子を偲び建立された像で、屏風を往来される様子を表した「黒駒に乗る太子像」を見ることができます。

腰掛石

黒駒に乗る太子像

駒つなぎの柳

問三宅町産業振興課 ☎0745-44-3071 FAX0745-43-0922